古代文字資料館発行『KOTONOHA』第150号（2015年5月）

KOTONOHA第150号に思う

中村雅之

古代文字資料館の機関紙たる『KOTONOHA』が今回で150号を迎えた。第1号の発行が2002年11月のことで、それ以降ほぼ毎月、12年半にわたって刊行され続けている。当初は100号を目標にしていたが、4年前にあっさりとその目標をクリアすると、次は200号を目指すことになった。今150号に到達し、200号も徐々に頂が見えつつある。この機会に『KOTONOHA』にまつわる諸々を振り返ってみたい。以下、『KOTONOHA』の前史も含めて、年表風に記述してみる。

1992年9月～1993年2月　パスパ文字の勉強会。当時富山大学に在職していた中村が東京における半年間の内地研修を許されたため、その期間を利用して吉池孝一氏と都立大学で毎週のように勉強会を開いた。それまで吉池氏は中国語の呉方言を、中村は切韻系韻書を研究していたが、この勉強会を機に二人とも対音資料に傾倒するようになった。

1994年2月　第1回対音対訳資料研究会。上記パスパ文字勉強会を承けて、広く対音資料・対訳資料を対象とした研究会として始まった。以後、2003年3月の第19回まで毎年2～3回開かれた。中村、吉池のほか、竹越孝、更科慎一、福盛貴弘の諸氏を主要メンバーとして、富山大学・都立大学・拓殖大学・鹿児島大学・愛知県立大学などで開催した。最後の第19回は金沢の「ことのは塾」で開かれた。「ことのは塾」は中村が2002年9月に富山大学を辞した後に金沢で開いた私塾であるが、その塾の名が『KOTONOHA』という雑誌名の由来である。（これについては本誌60号の拙稿を参照）

2002年11月　『KOTONOHA』第1号刊行。この時点で古代文字資料館はまだない。発行母体は愛知県立大学の吉池研究室であり、『KOTONOHA』誌も学生と教員が好きなことを書く同人誌であった。今では時に学術誌のような扱いを受けることもあるが、本質はやはり同人誌であって、気軽にあることないことを書いてよい雑誌なのである。もちろん、まじめな論文や資料も大歓迎だが、同時に論文の体をなさない半端な文章だって全く構わない・・・と私は思う。それゆえ、当時の表紙には「‘言語に関わる考察の切れ端’を集めた雑文集」と記されていた。

2003年11月　「古代文字資料館」設立。2000年9月のことであったと思うが、対音対訳資料研究会が富山大学で開かれた際、雑談の場で吉池氏がいくつかの古いコインをテーブルの上に出して見せた。パスパ文字のコインと満州文字のコインであったと記憶する。普段我々が研究会で論じている文字が、生の資料として目の前にあることに興奮した。その後、吉池氏の収集癖に火が着き、わずか3年で「古代文字資料館」を設立するに至る。初期の目玉は何といってもパスパ文字資料で、官印・私印・貨幣など、この文字に興味を持つ者にとってはまさに垂涎ものというべき資料を展示した。後にはパスパ文字漢語やパスパ文字モンゴル語の拓本資料なども加わり、今でもパスパ文字資料は古代文字資料館の柱の一つとなっている。1992年のパスパ文字勉強会が古代文字資料館の設立に結実したと言えるかも知れない。資料館の設立以降は、『KOTONOHA』も古代文字資料館を発行母体とするようになり、論考にも収蔵資料の解説が多く含まれるようになった。

2004年7月　ウェブサイト「古代文字資料館」開設。資料をウェブ上に公開するだけでなく、『KOTONOHA』の個々の文章をPDFファイルで公開することになった。90年代半ば以降にPDFが普及したことで、特殊文字

や画像などを通常の文章に混在させて、レイアウトを崩さずに表示できるようになり、『KOTONOHA』のウェブ上での公開も可能になった。

2007年8月　KOTONOHA単刊№1として『清代満州語文法書三種』(竹越孝編訳)を発行。これ以後、古代文字資料館の刊行物は「単刊」として発行されることになるが、これは単に便宜上の呼称であって、必ずしも「モノグラフ」に限定されない。時折出る「単発的な刊行物」と理解されたい。

2007年10月　単刊№2『中古音のはなしー概説と論考』(中村雅之著)発行。

2008年10月　単刊№3『語学漫歩選』(古代文字資料館編)発行。

2009年9月　単刊№4『有坂秀世研究ー人と学問ー』(慶谷壽信著)発行。

2011年3月　単刊№5『KOTONOHA百号記念論集』発行。当時の通常版は輪転機で印刷したB5版の紙をホッチキスで留めただけの手作り雑誌であったが、100号を記念してISBNを付した正規の刊行物とした。執筆者も13人に達した。特別に故長田夏樹氏の最初期の論考「日本語再建私説」を掲載できたのも幸いであった。

2012年12月　単刊№6『KOTONOHA　2012』発行。この年から、それまで毎月小数部発行していた簡易印刷版を廃止し、年末に1月号から12月号までの一年分をまとめた合本の形で発行することになった。月刊の『KOTONOHA』はウェブ上のPDFファイルのみとなった。

2013年12月　単刊№7『KOTONOHA　2013』発行。

2014年12月　単刊№8『パスパ字漢語資料集覧』(中村雅之主編)発行。

2014年12月　単刊№9『KOTONOHA　2014』発行。

2015年4月　単刊№10『新刊清文指要　―翻字と翻訳―』(竹越孝著)

以上が『KOTONOHA』をめぐる簡史である。この間、多くの研究者や学生に執筆して頂いた。最も多く執筆したのはこの雑誌の発起人でもある吉池氏で、最近まで毎号に書いていたが、昨年大学で責任ある役職に就いて以来多忙を極め、ついに今年になって初めて休筆した。竹越氏は朝鮮資料や満漢資料の紹介を中心に、9号以降一度も休むことなく書き続けている。中村は見過ぎ世過ぎに追われ、年に3～4回は執筆を見送っている。竹越美奈子氏の広東語に関する連載は、10回続いた「十九世紀の広東語」を承けて、昨年から「二十世紀粤語研究」が始まった。大竹昌巳氏が断続的に発表している契丹語に関する論考も楽しい。最年少の寄稿者は142号の乾佑真氏で中学生である。

『KOTONOHA』が自由で刺激的な表現の場として150号を迎えたことは有難くも喜ばしい。目標の200号に向けて多くの人々の参加、ご支援をお願いします。